

ニューヨーク・タイムズが、いかに歴史を弄んでいるか

(前半)

【訳者注】ワシントンの政治家のサイコパスぶり、主流メディアの傲慢が、今に始まったものではないということを、ロバート・パリーはここで示している。ここ（前半）では、ちょうど半世紀前のベトナム戦争におけるニクソンの陰謀を例にとっている。最後のページで言っているように、50万米将兵の命よりも自分の政治的野心を優先するという事は、普通の人間にできることではない。また、あからさまなウソをつくことと、そのウソを、柔順な従僕のように堂々と復唱するという事も、普通の人間にできることではない。（ただここでは、ニクソンの姦計について決定的な証拠が出てきたので、NYタイムズは、ついこれまで態度を変えたと言っている。）我々は、この“普通でないこと”を押し付けられて、これが普通だと思って生活している。日本への原爆投下を決定したいきさつも、ニクソンの選択のような、何人かの自己の地位保全が動機だったと言われている――

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160602.pdf>

Robert Parry

January 19, 2017, Consortiumnews.com



現政権の悪事について確かな真実を語らないことによって、ニューヨーク・タイムズ——と他の米主流メディア——はアメリカの民主主義を危機に陥れてしまった。

NYタイムズや、他のいくつかの主流ニュース・メディアが、何かのトランプ支持“フェイク・ニュース”や、インターネット“陰謀論”を指さして、自分を職業的ジャーナリズムの鏡であるかのように振舞うたびごとに、私はその自己欺瞞と偽善に吐き気を催す。

私ほど、フェイク・ニュースや事実でない陰謀説を憎むものはいない。しかし悲しいことに、主流新聞が、そのような虚妄を取り入れることによって、アメリカ人民の信頼を失い、自分

自身に都合のいい物語とウソを語る、現政権のプロパガンディストになってしまった。

こうした欺瞞を警告する番人として働くのではなく、タイムズやその主流仲間たちは、現政治体制の弁明役とプロパガンダ担当者に変貌してしまった。

イラクが“敵”である場合には、我々は、いかに存在しないイラクの大量破壊兵器が、我々全員にとって危険であるかという、荒唐無稽な話を聞かされる。シリアがワシントンの標的にある場合には、我々はそこで起こっていることについて、一方的な説明を聞かされる——“政府側”は黒い帽子、“反政府側”は白い帽子を被せられて。

米務省が、選挙によるリーダーを追い出すために、ウクライナでクーデタを後押しする場合には、我々は、彼の墮落の話とか、民主的に選ばれたリーダーを倒すことが“民主主義の進歩”であるかのような話を聞かされる。現在、我々は、米政府がロシアについて振り回すあらゆる悪口を、無批判に復唱して教えられている。

このアメリカのジャーナリズムの危機が、近年ますます厳しくなってきたにもかかわらず、そのパターンは全く変わっていない。それは、主流メディアが、現代史の最も重要なニュース物語の多くを、いかに無視してきたか、それがほとんどの場合、いかに真理を知る上で障害となってきたかに現れている。

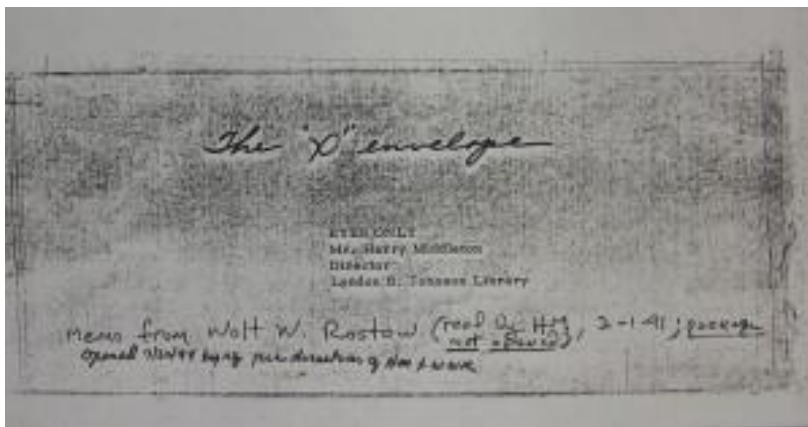
そこで、ついに圧倒的な証拠が現れ、否定し続けることがもはや不可能になると、主流メディアは、ずたずたになった信用を取り戻そうとして、新しい一片の証拠にしがみつき、これまでに言われたことはすべて噂だった、しかし今、我々は長く囁かれてきた物語を真剣に受けとめることができる——タイムズがそう言うのだから、などと言っている。

例えば、1968年、リチャード・ニクソンは、副大統領ヒューバート・ハンフリーに対する大統領選挙戦が厳しかったので、これを決定的に有利にするために、リンドン・ジョンソン大統領のベトナム戦争和平交渉を妨害したことがあった。“リアル・タイム”で——ニクソンが彼の戦争を進めている間も、その直後の数年間も——二級の新聞や独立ジャーナリストが、ニクソンの“国家反逆罪”とジョンソンがひそかに呼んだものを、糾弾する報道をしていた。しかしタイムズや他の“高級紙”は、この話を陰謀論にすぎないと言っていた。

何年かが過ぎて、ニクソンの有罪の証拠はますます明らかになったが、この話はなおも、大手メディアの敷居を跨いで真剣な話題になることはなかった。

決定的証拠

数年前、私はこの 1968 年の事件の詳しい物語を、ジョンソン大統領図書館によって極秘解除された資料から編さんし、この資料を Consortiumnews.com に公表した。私はこれを作るのに、新しく利用可能になったジョンソンの電話記録に依拠しただけでなく、The 'X' envelope とラベルの貼られた、トップ・シークレットの盗聴記録のファイルも利用した。これはジョンソンが、彼の国家安全保障アドバイザー Walt Rostow に命じて、ニクソンの就任式前に、ホワイトハウスから持ち出させたものである。



私はまた、この消えたホワイトハウスのファイルに対する、ニクソンの執念がどれほどのものだったか、彼が所有者を突き止めようと、Plumbers と呼ばれる強盗団を結成したが、その活動は後に、ウォーターゲイト・スキャンダルの形で浮上したことを跡付けた。

言い換えると、ニクソンの 1968 年の“国家反逆罪”の謎を解き明かすことによって、現代アメリカ史の 2 つの核心点である、ベトナム戦争とウォーターゲイトの物語が、変わってしまうということである。しかし米メディアは、必死になってこれらの新しい暴露事実を無視した。

昨年 11 月、“オクトーバー・サプライズ”に関する論評において——FBI 長官 James Comey が議会に対し、FBI は、ヒラリー・クリントンの E メール調査を再開したと言った件とのつながりにおいて——タイムズは、1968 年事件の次のようなサマリーを載せた——

http://www.nytimes.com/2016/11/01/us/october-surprises-dont-necessarily-sway-elections-or-occur-in-october.html?_r=0

リンドン・B・ジョンソン大統領は、和平会談が“新しい、かつてない希望的な局面に入った”という彼の主張に基づいて、北ベトナムの爆撃を停止すると通告し、南ベトナム政府とベトコンを交渉に招請した。戦争が早く終わることを願って、この通告は、民

主党大統領に指名された副大統領ヒューバート・ハンフリーの、世論調査の成績を持ち上げるようにみえた。しかしそれでも、ハンフリーは、共和党の元副大統領リチャード・ニクソンに対して、大統領選では遥かに力及ばなかった。

言い換えると、タイムズは、ジョンソンの爆撃停止と、停戦会談を進めようという主張を、“オクトーバー・サプライズ”として扱い、選挙をハンフリーに有利になるように動かそうとした。しかし今、停戦合意は実現確定になっていて、“オクトーバー・サプライズ”は、南ベトナム大統領を説得してパリ会談をボイコットさせるという、ニクソンの交渉妨害であった証拠が、明らかになっている。

タイムズは、物語を逆さまにして、主流の外だとはいえ、何年も前から出回っていた説得力ある新しい証拠に照らして、この件を再吟味することを怠ったのである。

しかし、この物語の実態への軽蔑的態度が、ついに吹き払われつつあるように思われる。今月初めに、タイムズは、ある署名入り記事と、それをフォローアップするニュース記事で、ニクソンの 1968 年の運動で、彼が主席補佐官 H. R. Haldeman に指令していた内容を示す、暗号のノートの存在を明らかにした。

https://www.nytimes.com/2016/12/31/opinion/sunday/nixons-vietnam-treachery.html?_r=0

<https://www.nytimes.com/2017/01/02/us/politics/nixon-tried-to-spoil-johnsons-vietnam-peace-talks-in-68-notes-show.html>

http://www.nytimes.com/interactive/2016/12/31/opinion/sunday/haldeman-notes.html?_r=0

“ハルデマン・ノート”——歴史家の John A. Farrell がニクソン大統領図書館で発見した——は、ニクソンが補佐官ハルデマンに対し、“Anna Chennault を SVN に働きかけさせ続けよ”と言っているのを明らかにしている。SVN は南ベトナム (South Viet Nam) であり、この運動の南ベトナムへの主任密使、右翼の中国人亡命者 Anna Chennault に言及している。

ニクソンの決め手は、Chennault に、南ベトナム大統領グエン・バン・チューへの伝言を託し、もし彼がジョンソンのパリ平和会談をボイコットして、交渉を妨害してくれるなら、ニクソンは、戦争に対するアメリカの軍事支援を、継続して確約するというものであった。

それを妨害するためなら何でも

もう一つ、ハルデマン・ノートから明らかになったことは、ニクソンが、上院少数派リーダーEverett Dirksen（共和、イリノイ）に依頼して、ある計画された爆撃停止について、ジョンソンに文句を言わせる意図をもっていたことである。一方、ニクソンは“それを妨害するためなら何でも”やろうとしていた。

ハルデマンの走り書きは時に判読しにくいですが、次の書き込みは“SVN”についてのもので、こう付け加えている——“大丈夫だと彼に言え”（tell him hold firm）。これは後に、1968年の運動の最後の数日間に、Anna Chennault が南ベトナムの高官に伝えたメッセージと同じである。

ファレルの発見は確かにニュースに値するが、その最大の意味は、タイムズや他の主流メディアが、これを“陰謀論”として一蹴する長年の態度をやっと改めさせる、きっかけとして働いたことかもしれない。

タイムズはファレルに、今年1月1日の署名入り記事欄のスペースを与えて、その発見の説明をさせ、タイムズ自身がフォローアップして、ハルデマン・ノートについて自社説明を書いた。この物語には、元ニューズウィーク主筆Evan Thomasのような主流記者の、ファレルは「長い間ささやかれていたことを、やっと確定させた」といった、好評のコメントが含まれていた。

もちろん、ニクソンのベトナム和平会談妨害の話は、“長い間ささやかれていた”どころではなかった。何人かのジャーナリストが次々と、その証拠をつなぎ合わせており、そこには、この陰謀が行われているときからの証拠もあれば、また、利用できるようになって20年の間に黄色くなった政府文書を、漁って出てきた証拠もある。

しかし主要新聞はほとんど、この証拠の蓄積を一蹴してきた。明らかにそれは、その時代についての彼らの“権威的な”物語に、挑戦するものだったからである。ニクソンの偏執狂的な振舞いのいくつかは、どれほど奇妙で邪悪なものだったとしても、それはあまりにもかけ離れた異常なことなので、彼が、1968年のベトナムの戦争地帯の50万米将兵の安全より、自分の政治的野心を優先するとは考えられなかったのだ。（強調役者）

アメリカ人民はこの無念やる方ない真実を聞かされて、彼らの政府に対する信頼は、根底から揺さぶられたであろう——ベトナム戦争での米戦死者が5万8,000、それに数百万のベトナム人が殺されたことを考えるならば。（死者の半数近くが、ジョンソンの和平会談が失敗した後に出ており、一方、ニクソンは、アメリカの直接的な戦争への役割を、さらに4年延長することによって、グエン・バン・チューへの約束を果たした。）

[更なる詳細は、Consortiumnews.com の “LBJ’s ‘X-File’ on Nixon’s ‘Treason’” および “The Heinous Crime Behind Watergate” を見よ]

<https://consortiumnews.com/2015/03/13/lbjs-x-file-on-nixons-treason-2/>

<https://consortiumnews.com/2014/08/09/the-heinous-crime-behind-watergate/>

(後半へつづく)